
殺人の記憶

那智 悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人の記憶

【Nコード】

N3936E

【作者名】

那智 悟

【あらすじ】

神：殺人者は順番にまわってくる…。人の生死は神に委ねられている。そんな神はあなたの近くににいる人かもしれない。さあ…今回、神の任務にあたる者は？！

鏡 伸介の章 第1話 昼と夜（前書き）

登場する人物・団体は架空のものです。実在するものとは一切関係ありません。予めご了承ください。

鏡 伸介の章 第1話 昼と夜

今日も晴れ。いつも通り満員電車で揺られて会社に向かう。

俺はなんの変哲もないサラリーマンだ。普通に営業を上司と客からどやされる。

普通のサラリーマン…。

でも…それも昼の話だ。

夜には…殺し屋だ。

ただ記憶がない。すべて終わった後には記憶がなくなるのだ。

普段は自分で言うのもなんだが…優しいというの形容詞そのものの人間と言ってもよい。

あと…騙されやすい。

こんな男が人を殺せるなんて誰も思わないだろう。

俺自信もそう思っていた。俺には秘密がある。そう『殺し方』だ。誰にも見られてもいけない。誰にも話してもいけない。

知っているのは組織の人間だけだ。ただ顔は知らない…。連絡だけがくる。その指令に従うだけだ。

報酬は…自分の命。断れば自分の命が殺られる。やるしかない…。

こんな生活だと気が狂ってしまう。だから人を殺した後には記憶がなくなるのは都合がよい。

毎回自分に課せられた任務と『自分の殺し方』と『記憶の喪失』について知らされる…。

俺はいままで何人殺し…

いつまで殺し続けるのだろうか…。

そんな思いをしながら記憶を無くす…。

鏡 伸介の章 第2話 着メロ

事務所に電話が鳴り響く。

『おい　！！電話が鳴ってるぞ！！この不景気に電話を下さるお客様を待たせるんじゃない！！』

そう社員に怒鳴るのは

部長 蠟山 大輔だ。小肥りだが風格があり見た目やくざっぽい…。

そこに遅れて事務所に入って来た者がいる。

鏡 伸介。彼だ…。

『部長！！お早うございます！！いやゝいい天気ですねえ…』

蠟山が睨みつける。

『鏡君、今何時だね？』

『えーと、今8…29ですから遅刻ではなくセーフかと…。』

呆れた蠟山が鏡の後ろを指さす。

『アレを見なさい！！君の成績だ…先月は君は何してたのだい？！
営業たる者、段取りを前の日に済ませ早めに出社すべきだろ？！』

『すみません…』

『もう…いい。席につきなさい！！』

と言った時には鏡は席に着いていた。

鏡は席に着くと少し考えていた…。

（昨日俺何してた？！気が着いたら布団の中だった。）

蠟山の声が響く。

『鏡くん!!この書類はなんだ!!やり直した!!』

社員『部長…鏡外出しましたけど…』

『夕方』

今日は俺は珍しくいい営業ができた!!
そして…

先輩の秋山 莉奈さんと夜デートなのだ!!
デートと言っても単なる食事の予定だけど。

『あっ莉奈さん!!』

『鏡くんお疲れ様、何処に行く?!!』

『俺いろいろ考えたんですけど…カラオケなんてどうですか?!!今

のカラオケはですねえ、歌えて、食べれて、飲める!! 無駄な移動
しなくていいんです!! あれ?! 莉奈さん?!』

莉奈の姿がない。

(やっちゃったのか?! 俺は?! センスないのか?!)

鏡の携帯の着メロになる。

『誰だ?! こんな時に!! もしもし!! ハロー?! ん?! あれ?!
携帯じゃないな... 何処から?!』 荷物をあさるがそれらしい物はな
い。

鏡は気がついた... 頭の中から聞こえていた...

鏡 伸介の章 第3話 神の仕事

頭の中で着メロになる…。

しかし、周りの人がまったく気にしないところを見ると、おそらく俺の幻聴なんだと鏡は思った。

しかし、暫くすると…声が聞こえた。

『また…始まります。まだ終わりません…。』

そして…。

なんらかの映像が鏡の脳裏に浮かぶ。

殺しの場面だ。

『俺疲れてるのか…。』

人は自分に都合悪いものはこんな処理をしてしまうものだ。

鏡は自宅へと帰った。

(あの着メロ…あの映像…。)

そんな事を考えながら疲れをとろうと眠りに入ろうとする。

?!

………暗い。

真っ黒な空間に鏡はある。

先ほどまで眠ろうと考えていたのに…夢にしては早過ぎないか?!
なんて鏡は思っていた。

夢と現実の違いを見分ける一般的な方法…頬をつねってみた。

『いてっ!!!』

痛みをとまなう。

またあの声が聞こえる。

『鏡…あなたにはまだ役目をはたしてもらいます。記憶は残ってないだろうから…またいつものように教えましょう…』

意味が解らないがなぜかいらつくような…なんとも言えない気持ち
が起きていた。

『人はいづれ死ぬ。あたり前だろと思うでしょう?! 永遠なんて事はない。人は老いて死ぬ。何らかの事故で死ぬ。自殺する。死とは誰でも起きるもの。じゃあ誰が決める?! そう神です。神は生と死について人に問いかける。では、神はどうやって生まれたのでしょうか?!』

(そんなのわからない…。)

『神はあなたです。言いかえれば人は皆神なんです。生かすも殺すもできる。順番にまわってくるのです。ただ、たまにそれを無視した者が殺人犯なのです。道具や己の体を使って死を勝手に与える…。神とはそれらを使わず己の能力をもって死を司る者なのです。そう神には生を操作する事はできない。生とは神や殺人犯が何もしなかった時に起きるもの。神は殺人者であり、神でないものを殺人犯、殺人鬼と言う。では何故、人を殺すのか?…バランスです。生体系の頂点に立つ者は数が多くてはならない。ただ昔に比べて神が神のやるべき仕事をしなくなった。必要以上にやさしさを持つようになった。人は増えバランスが崩れつつある。それを正すために我らがいるのです。』

『貴方は神に今回まわって来ました。人は名前の他に名字を持ちます。なんの為?! 一族を表すためもありますが…古来名字は神としての能力を表します。鏡あなたはその名の通りミラー…鏡の能力な

のです。では…殺してきなさい…神の仕事を。』

現実の自分の部屋に戻った。

鏡は何度もこの話を聞いているのだろう。自然に…鏡は鏡を覗く…。

鏡 伸介の章 第4話 相棒

鏡は自分に語りかけてきた声の最後の言葉を思い出した…。

『鏡あなたが自分が神である事に気付かれた時、あなたは勿論、知った者ですら我らは殺さなければなりません…。見られてはいけない。話してもいけない。注意して下さい。尚、殺す事を拒んだ場合もあなたには死んで頂きます。報酬はありません。しいて言えば…あなたの命です。殺す事は神であるあなたの義務なのです。』

(なんのことやら…。)

鏡は身近にあった鏡を覗いた…。

……………。

……………。

『鏡が能力?! なんでもない普通の鏡じゃないか…。』

鏡はその場を離れて冷蔵庫に冷やしてあるビールを取りに行こうとした…。

その時鏡は自分の目を疑った!!

鏡の中の自分が冷蔵庫からビールを取り出している!!

『俺はまだやろうとしたただけだぞ…。』

次の瞬間、鏡の顔から血の気が引いた…。

『…よう相棒。ビール頂くよ。俺が飲むって事はお前の腹にも入つつう事だから、気にすんな。こちらら日頃お前の真似して疲れてんだ。どうせお前、記憶消されてんだろ?! 毎回びっくりして阿呆かっ!!』

段々、記憶が甦る。俺は確かに…確かにこの鏡の中の俺という相棒と殺しと言う神の仕事をしていたんだ!!

『ようやく思い出したな…。そう俺はお前であり、お前は俺である。ただ俺達の関係は他の奴らとは違う。鏡を境界にして別々の行動がとれるんだ。ただ注意が必要だ。俺達以外のものはそうだな…。この缶ビールつつうわけだ。』

鏡の中の鏡は、ソファで脚を組んで缶ビールを飲んでいる。

鏡は振り返った。

そこにはまるで透明人間が缶ビールを飲んでいるように缶が宙に浮いている!!

鏡は感じる。自分の体にアルコールが入っていくのを…。

鏡 伸介の章 第5話 偵察

段々と記憶が甦る…。

自分の能力。自分がやるべき事。

今回の組織からの指令が相棒から知らされる。

ターゲット

小林 義雄

職業

金融業 経営者

特にこの金融業では法に触れる事はしていないようだ。それどころか自ら孤児の子供達の面倒をみている。世間からすれば人間的に素晴らしい分類に入る。

（やっかいな仕事だな…。）

下司なやつなら躊躇いも起きないが、こうも人がよくては、やりずらい。

ひとまず様子をみに行くか…。

自ら行く訳には行かない。相棒にみてきてもらおう事にした…。

鏡の中の相棒は鏡の世界なら何処でも一瞬で行動できる。ただ殺しの行動をとる時は俺とその場にいないといけないルールがある。

相棒『このおっさんか…。何か悩んでそうだな…。』

小林 義雄は金融業でそれなりの成功をおさめ善意で孤児達の面倒をみている。結婚もしていない為、子供もいないので孤児達を自分の子のように可愛がっていた。

しかし：彼は病をわずらっていた。余命を気にしているようだ。だが、自分の生命よりも子供たちの今後を気にしている。子供の為に生命保険を高めにしようとしていた。残そうとしていたのだ。彼等が一人でやっていける時期までの資金を……。未来のあるこの子供達の人生を自分がいなくなる事でだいたくなくしたくないということなのだろう。それほど彼にとって子供達はかわいいのだ。

相棒は鏡にこの事を報告した。

鏡 伸介の章 第6話 戸惑い

鏡は報告を受けた…。

相棒は鏡と一身同体だ。彼の考えがよくわかる…。

鏡はこの男を殺せない。

今まで鏡が殺してきたやつらとは異質な人間だ。

鏡が小林を殺さない事は鏡の死を意味する。

鏡が死ぬ事は自分が消える事を意味する。でも、相棒は彼の考えともちろん同じだ。彼自身でもある。双子以上の関係だからだ。相棒は自分が消える事は恐れない。相棒自身が鏡の意思の一つにすぎない。彼は反対はしない。鏡が決定する事がすべてだからだ。

でも…。自分が意見する事も鏡の意思でもある。鏡と『一身同体』だからだ。

相棒『お前、やつをやれるか?!』

鏡『…………。お前がよくわかるはずだろ?! みただろ?! あいつが自分の子と想う子達とのやりとりを…。』

相棒はみていた。あのターゲットである小林の孤児達の和やかな光景を…。

小林『みんな!! こんにちは!! 元気にしてたか!!』

孤児『院長先生!!』

みな小林に群がり各々の最近の些細な近況を笑顔で語っている。

小林は笑顔でそれに答えている。

小林自身、結婚していて子供もいれば今のように自分の子にその笑顔を奮っていたかもしれない…。

でも、今の小林にはかれの人生で一番のやりがいのある事が彼等、孤児達達の行末を見届ける事なのだろう…。

しかし、自分の蝕む病はそれをゆるさない……。 彼の意思に反して
……。

小林は孤児院の経営を副院長の信頼する江口 知則に委任している。
孤児院をやり始めようとする頃から協力してくれていた親友だ。

いや、だったと言わなきゃだったのか……。

鏡 伸介の章 第7話 私利私欲

江口は孤児院の副院長だ。すべてを任せられている。

小林が事業に成功し、孤児の面倒をみようと考えていた頃、江口が積極的に助言し今に至っている。

人は変貌する。私利私欲とはよく言うもの。自分に利益ある機に人は決断に迫られる。

人は善にも悪にもなる。

どちらにせよ自分に利益をもたらすものに心は少なからず動いてしまう。

江口は動いた。機会を逃すまいと…。

小林が病で死が近い事を知ると、決断した。

小林の後任は誰?!

子供は?! いない。

親族は?! いない。

俺だ!! そう思った男に迷いはなかった。すべての事業に権力を持つことのできる事にもはや善意は消えていた…。

江口は小林や孤児達はもちろん孤児院の職員ほか自分以外の誰にも自分の考えを悟られまいと隠しとおすつもりだった…。

が…。

人間とは喜びが頂点に達すると一人の時…隠している事を誰かに…誰かに話したくて独り言を言ってしまう…。

江口『慈善事業は不要だな。金にならないものは…。』

確認されていた…。

確認していた…。

鏡に…。

いや相棒に…。神である鏡はもう過去の記憶は取り戻している。

殺人のプロだ。

ここに江口の生死がが決まった。

鏡はターゲット以外誰を生かしても殺してもよい。鏡は殺しをしないといけない神だ。しかし、そんな殺屋も最低限よい殺しをしたいと願う。

江口は不要だ…鏡はそう思った。

鏡 伸介の章 第8話 訪問…そして死

小林はすでに死ぬ事が決まっている。

そう江口は結論付けていた。普通であれば彼の思うようになっていたかもしれない。

ある意味江口は考えたであろう…。

神という存在を。

そして、自分にこのチャンスを与えてくれたにちがいない。

その神が自分の命を奪うとは思いつかなかったろう…。

あたたかい日差しの昼下がりの頃…江口はいた。

自分の真の気持ちを抑えていた江口も次第に膨らむ期待に嬉しさを隠せず孤児の子供たちにいつも以上に優しさをみせていた。

なにも知らない子供は江口に語りかける。

子供『江口先生、なんか嬉しそうだね!! なんかいい事あったの?』

江口『わかる?! とても嬉しい事があったんだよ。でもナイショだよ』

子供たちはそんな江口をみて笑顔で接した。

(このガキ達は可哀相なくらい馬鹿だな。自分の施設がなくなるとしらずにさ。)

江口は副院長室に戻った。

江口『この孤児院の仕事も後少しか…なんか寂しくなるな…なんてなあくくく。』

「孤児院広場」

もう日が暮れている…。そこに職員に話しかける若者がいる。…鏡だ。

鏡『あのゝ趣味で写真とっているんですが、今度みなさんを撮らせて貰って宜しいですか?! テーマは「笑顔」なんです。』

職員『いいと思いますよ。小さい施設ですが子供達は元気よくいい笑顔が撮れるんじゃないかしら。』

鏡『お姉さんの笑顔も撮りたいですね。』

職員『アハハ ではオーナーの小林にも話しておきます。』

鏡『有難うございます!!ではまたご連絡致します。』

間もなくだった。

副院長室で無惨な死を遂げていた江口が発見されたのは…。

鏡 伸介の章 第9話 その時の相棒

鏡は孤児院の職員と会話をしている…。

鏡の相棒はその場にいれば殺しができるルールが成り立つ。この時、相棒は鏡の世界ではなんでもできる人物になるわけだ。

鏡が能力をだせる時、相棒の行動は、誰にも邪魔される事はない。鏡に写る相棒の行動に対して、反応するのは至難な技だ。ましてや、まず相棒の存在にターゲットが気付く事がない。そして、相棒には触れない…。

副院長室の窓から鏡が職員と話しているのが、見える…。

窓ガラス…そうそれも透明ではあるが、光りの反射で鏡の役割もする…。

相棒がその世界にも存在できていた。

相棒は静かに江口に歩みよる…。

江口『なっ！！なんだ！！』

江口の頭を相棒が後ろから掴んだ！！

江口『だ、誰だ！！』

江口はもがき相棒を振り払おうとする！！

しかし、現実の世界にいる振り払う人物は、外で職員と話している
ので、触れるわけがない。

江口は恐怖感からものすごい形相になっていた。

一瞬だった。

首の骨が折れる音とともに、あの恐怖感による形相のまま死んでいった…。

相棒は自分が殺した相手であるが、なんとも言えない気持ちであった。欲望という「魔物」に取り付かれ、神である鏡の目に入ったばかりに死ぬはめになったのだから…。自分は鏡の能力の一つにすぎない。それは目であり、鼻であり、口であり、ただ…自分には意思がある。こんな思いをするのは鏡の中に「人殺し」である神である鏡に神に相応しくないとあるから、自分にこんな思いが起きるのだと感じていた。「生とは？」そんな事を考える相棒がいた…。

鏡 伸介の章 第10話 訪れた夜

小林は病院の一室にいた。

主治医『小林さん、貴方の意向どおり、正直に言います。脳にある腫瘍が摘出できない場所にあります。残念です。』

小林『そうですか…。先生有難うございます。貴方のおかげで残りの人生をある意味無駄なく過ごせそうです。私に告知してくれなければ、覚悟が出来なかった…。先生には感謝しています。』

主治医『そんな…小林さん!!! 私も出来る限りの事はしていきます!!! 一緒に頑張りましょう!!!』

小林は江口が亡くなり、自分の事より子供達の事をいままでより気にするようになっていた。

小林『私には時間がない…あの子供達が私のせいで惨めな人生を向かえなければよいのだが…』

数日後…

江口が亡くなり、葬儀も終わった頃…

施設に小林が江口がいないこともあり、以前より来る機会が多くなっていた。もちろん子供達は江口の本当の姿を知らない…。小林もそうだ。

小林は子供達に言う。

『みんなも知ってる通り：江口先生が亡くなった。先生はみんなのことが好きだった。みんなも先生が好きだったろ？！先生に恥ずかしくないように今後生きていきなさい。』

子供達『はい！！』

施設の子供達はそう返事すると江口の死を惜しみ泣いていたのだった。

江口の真の姿を知らずに…。

間もなく、夜を迎え鏡が訪れた。先日、約束した件で…。

鏡『今晚は！！先日お伺いした者ですが、小林院長はいらっしゃいますか。』

小林『あっ…話しは伺っております。先日、うちの先生が亡くなって、子供達が元気がなくて…。しかし、いつまでも哀しんでいられません。私も長くな…いや。そうだ！！私と子供達みんなを撮ってくれませんか！！』

鏡『はい！！是非！！』

鏡は遂にターゲットである小林と接触した…。

鏡 伸介の章 第11話 生の喜び

みんなが揃い鏡はシャッターチャンスをうかがっている。

鏡『みんなこっち向いてねえ。はい！！マヨネーズ！！あっ！
！チーズ！！』

……。うけない…。鏡は笑顔を撮ろうとギャグを考えている。そんな鏡が可笑しくて子供達に笑顔がこぼれた。

カシャ！！

みんなのいい笑顔が撮れたようだ。

その時、子供たちの声が響いた！！

『院長先生！！』

小林がその場に倒れている！！

鏡や職員、子供達が小林を囲み寄る。

小林『大丈夫…。一瞬目の前が暗くなったようだが…。心配しないでいいよ…。』

鏡『大丈夫ですか?! 念の為、病院に行ったほうがいいですよ!!』

小林はいいと言っているが、周りのみんなが強制的に病院に行かせた。子供達は心配していた。

小林は病院に行く中…。自分の身体が何かおかしい感じがしていた。

脳腫瘍である自分であるが…。病院に向かっている自分であるが…。むしろ体の調子がいいように感じていた。

「病院の一室」

主治医『小林さん…。お伝えしたい事があります。原因が何故だかわ

かりませんが…ないんです。腫瘍がないんです!!」

小林『え!! 私生きられるんですか!! 先生!!』小林の目からは涙がこぼれていた…。

鏡だった…。カメラで写真を撮る時、鏡の中の相棒が脳腫瘍の『細胞を』殺していたのだ。鏡の中の相棒は鏡の中では何でもできる。小林が倒れたのはその行動の直後だった…。

鏡 伸介の章 第12話 報告く己の死く

小林は生きている…。

殺すどころか助ける結果になってしまった。そして…いつものように鏡は『組織』に報告した…。

またあの時のように辺りは暗闇だ。『あの声』が聞こえる…。

『鏡…報告をしなさい。』

鏡は今回の任務の一部始終を話した。もちろん、彼自身任務『失敗』という事による自分にふりかかる『己の死』という恐怖にのまれそうだった。

（今まで俺の殺してきた者たちもこれを感じながら死んでいったん

だよな…。)

鏡は死を受けいれる覚悟をした。いや…覚悟は小林を救うことを実行に移していた時点であったといえる。

報告は終わった…。

一瞬、間ができた。

この間、鏡は少ない『時』に自分の人生をみた。
そして、自分のやった『神の仕事』の意義について考えてしまった。

(俺は今回の任務でわかった…。神に適していなかったんだ)

あの声が語りかける。

『そうです。鏡あなたは神に適していない。今回であなたの神の役目は終わります。そして…』

（きたな…。）

鏡は目をつむった。

（相棒…。ルールを破った俺は殺される。そうならばお前の意思も消える。今までありがとう。そして…すまん。）

そんな思いを相棒に対して考えていた。自分の任務とはいえ「殺し」という「汚い」行動をやらせていた自分。素直に従っていた相棒。鏡の素直な気持ちだった。

鏡 伸介の章 最終話 最後のプレゼント

目覚ましの音がする。

一人暮らしの男の部屋。

目を擦りながら時計をみる。

『5…30…たまには早めに会社に行くか…』

会社に到着。

鏡は営業の準備をし、後は出かけるだけだ。

『コーヒーでも飲んで営業に行くか…。昨日、俺飲んだっけなく記憶が飛んでる…。酒はほどほどにしよう。』

今日は鏡が営業で1番乗りだ。いつもなら部長 蛸山が誰よりも早くくる。

蛸山 『……！鏡くん。どうしたんだ……！君がこんなに早く来るの

は見た事ないぞ!!」

鏡『部長。この間の書類机の上に置いておきましたので…では営業に行ってきます!!』

蠟山『どうしたんだ…あいつ。』

鏡は自分の仕事に計画をたてるようになっていた。それは社会人として普通の事だ。だが、今までの鏡にはそれができていなかった。しかし、少しずつであるがその成果は積み重ねられていた。

「オフィス内」

莉奈『鏡くん!! おはよう!! 頑張ってるみたいじゃない!! 先月も営業成績が全国営業マンでトップだったみたいだね!! あっそうだ、今日暇だから夜食事でもする?!!』

鏡『そうですね!! ちょうど今日莉奈さんを誘おうと思ってたんです。じゃあ6…30に会社の受付前で!!』

その日の夜。鏡は前もって探した洒落たフレンチの店に莉奈を連れて行った。

旨い食事、楽しい会話、いい雰囲気の店内。莉奈も満足しているようだ。

♪♪♪♪

落ち着いた音楽が流れている。だが、突然！！音楽と店の明かりが消えた！！

アナウンス

『皆さん！！突然ですが今日、誕生日を迎えられた方がいらっしやいます！！しばしわずかな時間だけこの店内の明かりを彼女…秋山莉奈さんにお譲りください！！』

そう今日は莉奈の誕生日だったのだ。

奥からろうそくの光りにみちたケーキがくる。店内のみなが莉奈の為に拍手をし、お祝いの言葉をかける。

鏡のちょっとしたサプライズだった。

店をでると嬉しさにみちあふれた莉奈が鏡に言う。

『今日はありがと…。実は今日これを渡したくて食事に誘ったの…。鏡くん仕事で帰ってくるの遅いし…。どうしても当日までには渡したくて…。』

そう明日はバレンタイン。そう言うのと莉奈は手作りのチョコを渡した。

鏡『莉奈さん、有難う。俺…』

突然。莉奈が不意に誰かに押されて鏡に抱き着く形になった。相棒だった。彼からの鏡への最後のプレゼントだった。

「あの時」

鏡は目をつむった。

あの声『鏡：貴方には今回で神をおりてもらいます。後、今までの功績に免じて今回の任務失敗は：小林の腫瘍の殺しの『成功』としましょう。ただ今までの記憶は消え、神の能力は失います。貴方の相棒は消えます。』

相棒『待ってくれ！！少しだけ待ってくれ！！』

そう言った相棒の願った行動がこれだった。それを最後に相棒は自分の意思を持たなくなった…。

鏡は莉奈を見つめながら言う。

『俺：前から莉奈さんの事を…』

♪♪♪♪

着メロだ…鏡は嫌な予感がした…また始まる…。

そう○△◇商事の長谷川課長の催促が…。

鏡『いけねえ…至急の見積書だすの忘れてた!! 莉奈さんこの穴埋めは今度!!』

鏡はタクシーを止めて莉奈を送った。

莉奈は呆れながらも仕事に熱心に向かう鏡に恋心を持つのであった。

莉奈『鏡くん…頑張ってね』

彼は殺人者…神…ではない営業マン、鏡 伸介だ。

彼は今日も忙しい…。

鏡 伸介の章 完

鏡 伸介の章 最終話 最後のプレゼント（後書き）

次回より新章スタートします。

高坂 純平の章 第1話 朝食の時：

今年の四月、めでたく大学生になる…予定だった男、高坂 純平の朝が始まった。

純平は自分の寝室からリビングまで起きてから枕をもってくる癖がある。

そのままリビングで二度寝する。それを阻止すべく必要以上に顔を舐めるのは、愛犬 ククだ。

別に、純平が二度寝しようが大学生になれなかった純平には時間があるのでどうって事はない…。

どうせ浪人生だから気楽だ！！

と思ってる純平なので家族は心配している。気を使い一人暮らしをさせてやったのだが…あんまり勉強してないようだ。

純平『クク…有難う。おかげでパパはこの通り起きたよ。君のおかげで顔がべとべとだ！！どうせ朝ご飯が食べたいから、パパを起すんだろ?!』

純平は顔を洗いすっきりすると、ククに朝食を与え自分自身も牛乳とトーストを一枚たいらげた。

純平は世間からすればいい男だ。スタイルもモデル並によい。朝はほとんど食べないのだ。

大概、朝食を食べる時は前の日に夕食を抜いた時か運動した時だ。

純平はテレビをつけた。

『今日未明、東京都〇△区の広場で男性3人の死体が発見されました。不思議な事に現場の状況から広場の上空から落ちたと思われ考えられない…』

純平は頭をかきながらぼやく。

『なんだそれ！！パパにはよくわかりましえ〜ん。』

ククと朝から遊ぶこの青年こそ、この事件の殺人者…神である高坂純平本人なのだ。彼も記憶を消されているのだ…。

高坂 純平の章 第2話 パパとクク

『純平くん!! おはよう!!』

今日、今ので何人目だろうか?! なんて考えている男二人がいる。

川尻 亮と佐久間 篤だ。

予備校生の女の子達からも純平のかつこよさは評判がよい。

亮『純平くお前女作んないの?! モテるから楽勝じゃん?!』

篤『そうそう!! あんま作んないと原因が連れの俺らにあると思われんじゃんか』

純平『んく君たち!! 我ら予備校生は勉強がすべてなんだ!! 異性に心が動いているようでは志望校にうからないよ。それに彼女はいるさ...。』

亮、篤『誰?!』

二人だけでなく、その場にいた者たちも聞きよってきた。

純平『……………ククです。』

亮、篤『だろぅねえ』

イケメンの純平だがこんな人格だから、異性だけでなく同性にも結構好かれる。

そんな環境でも自分以外は敵である受験戦争の中にいるのは確かである。

その返は予備校生にもなると自覚するはずだ…。

だが、純平、亮、篤は少ないようであるが…。

〔午後〕

亮『やっと終わった。これからカラオケ行かねえ。ストレス発散しようぜい!!』

篤『いいねえ。純平は?!』

純平『俺はククに御飯あげないとな!!。パパの帰りを待ってるからさ。』

亮『はい…はい…じゃなく!!。娘さんに宜しく!!。』

篤『おい!!。亮!!。ククってさ彼女じゃなかったっけ?!』

亮が篤の頭を叩く。

亮『どうだっていいだろ?!。純平ワールドにあんまり入るなよ!!。!。気をつけないとまた受験に落ちるぞ。』

篤『ひえ〜!〜!…ってさ、これぐらいにしてカラオケ行かね…。』

亮『そだな…。』

「純平自宅」

純平『ククごめんな〜遅くなって…すぐに御飯つくるからねえ〜』

クク『早くしてねえ〜お腹ペコペコなんだから!〜!』

純平『ホントゴメンってさ…。』

純平が慌ててククのところへ駆け寄る。

純平『ククちゃん?!今しゃべってなかった?!』

ククが首を傾げる。

『何か問題ありました?!!』

高坂 純平の章 第3話 RULE

問題があるに決まっている。

目の前で愛犬ククが人間の言葉を喋っているのだから!!

純平は驚きはしたが…むしろ喜んでいるみたいだった。

しかし……喜びもつかの間……。

あたりを暗闇がつつんでゆく。ただ、純平と一緒にククもそこに存在した。

クク『やあ…初めまして。少々この愛犬の体をお借りする。』

ククの口から言葉がでるのは確かのようなだ。

クク『初めに言っておくが私は男だ。この犬が♀なので、声が女性

のものに聞こえるだけだ。』

純平は自分の身に起きている現象に戸惑いを隠せないでいる。

純平『あんた誰だ…。』

ククに憑依している者は言う。

『私は誰でもいい…。君は今回、順番がまわってきた…。やってもらうんだ…。結論から言う。人を殺せ!!』

純平は反論した。なぜ殺さないといけない?!自分にどうしてその順番がきたのか?!自分の考えうる問いをぶつけた。

『何故? 愚問だ。』

彼は言う。

『バランスだ…。この世はバランスで成り立つ。バランスこそがすべて。それをみなで順番でこなすだけだ…。君の周りでも起きてい

るのだ。ただこの役目を終えると記憶を奪われる。誰しも死を恐れこの役目を無くそうとするからだ。人間は心が弱い生き物だ。知を得るとますます弱くなる。その為に記憶を消すんだ。いにしえよりやってきた事だ…。ごくあたりまえの事だ。君は死後の世界を信じるか?! 神を信じるか?! 死後は無だ。死後の世界、神は死を恐れた人間が心の落ち着く場を求めた為に作られたものだ。真の神は人の言う死神に近いもの。その神たる存在は順番にまわってくる。君が今回その順番だ。役目を果たせ!! 神の役目を!! それが君の仕事だ。』

純平は言った…。

『僕がその役目を断れば?!』

その答えは『己の死』だった。ククの中にいる者は続けて純平に伝えた…。

見られてはいけない。

話してもいけない。

人に知られば自分はおろかその相手も殺される。

神の殺しのルールについて…

高坂 純平の章 第4話 悪い予感

カツカツと部屋のフロアリングとククの足の爪と接触する度に音がする。

純平の廻りを始めのしゃべりだした頃から歩いている。

純平はそんな行動を追っている。いや追わないといけなかった。喋る犬から目をそらした時、次に何が自分の身に起きるのか?!という恐怖感があつたからだ。

『君が殺しをするにもそれなりの能力を与えられている。その能力を使わなければ、君は単なる犯罪者だ。神の能力をもって死を与えよ。その力は…』

純平に名字が力の秘密である事が告げられる。

ククが突然走りだした。純平の懷に跳びつく!! 耳元でククが囁く…。

『ターゲットとなるのは…』

順平の目がいつも以上に大きく開いた。

ターゲットが告げられると辺りの暗闇は段々と明かりを取り戻してきた。

すると、ククがいつものように、順平の顔を舐めまわした。

『よかった…。クク…。元に戻ったんだね！！でも…ククは人間だったらあんなにかわいい女の子の声になるんだね。』
そういうと順平は逆にククの顔を舐めまわした。
もちろん…ククは嫌がり足をバタバタとしているのでありました。

『翌日の予備校前』

朝というのにざわついている。

（何かあったのか?!）

純平は人ゴミを開いて先頭近くまできた。

飛び降り自殺があったようだ…。

警察が現場を押さえている。生徒が予備校内に入れないのとやじ馬の為、次第に近く一帯が大渋滞を起こした。

やむを得ず、予備校は暫く休講の処置をとった。

純平の顔立ちは少し険しくなった。

（やな予感がしてきた…。）

高坂 純平の章 第5話 見えざる相手

一人の予備校生が自殺したようだ…。だが、若い学生ならざわめき度が凄いと思われるが…

実はこの予備校では最近、メディアにはとり上げられてないがこの他にも二人ほど自殺者が出ていた。そんな事もあり学生達はいくらか「またか」的な落ち着きをみせていた。

自殺者が三人…。

予備校生徒の間でもちょっとした噂になっていた。「原因はなんであらうか?!」「受験がそこまで彼らを追い詰めたのであろうか?!」など。昼の休み時間ではこんな会話があちらこちらで聞こえていた…。

そんな時、純平は思いました。あの時、ククの中にいた者がこんな事を自分に言っていた…。

『ターゲットは…純平!! 君と同じ神だ。誰かわからない…。君の存在に気付けばこちらに対してなんらかの行動をとってくるだろう…十二分に注意するんだぞ!!』

純平は情報を集めようと考えた。しかし、一般浪人生がそんな事をすれば警察にかえって怪しまれる。

暫く様子を見る事にした…。

数日後、純平の知る女の子も自殺と見られる死に方で亡くなった…。

どうも死ぬ前によくぼやいていたようだ…。

『もう誰も信用できない…。』この言葉がこの一連の多自殺事件の共通点だった…。「人の裏切りが自殺の原因?!」など純平は考えられるあらゆる推測をした。

純平はある事に気付いた…。予備校での成績優秀な者が自殺している事に…。

純平は推測を進めていく中である人物にたどり着いた…。

高坂 純平の章 第6話 感

純平は調べて行くうちにある人物にたどり着いた。

純平の通う予備校では定期的に校内模試がある。勿論、競争という受験の世界なので生徒に自覚させる為に順位をつけている。そんな生徒の中で…。

「化哨 彰」予備校でも成績はトップクラスだ…。そして気になるのは死亡した4人とも彼より成績が上だった…。今では彼がトップだ。その後、何事もなく予備校は平和な日々を取り戻している。そんな事もあり純平はこの人物に目をつけたのである。

その日の講義も終わり、

純平は化哨との接触を試みた…。

純平『化哨くん！！凄いねえ。成績トップじゃないか！！どうすればそんない点数とれるんだい？！』

化哨『僕は負けず嫌いだから、とことん勉強するんだよ。ただそれ

ただだね。高坂くんはこの予備校の模試でどれぐらい?!」

純平『………………。』

化哨『………………。まっ頑張ってよ。』

純平は化哨の口調と態度にいらつきが隠せない。

初めての接触では収穫と言えるものは何も取れなかった。

それから間もなくした日。五人目の犠牲者がでた…。『犠牲者』と表現したのは今回は明らかに他殺と判断される殺され方だからだ…。自宅のキッチンで腹部が裂かれて内蔵がはみ出すという悍ましい現場であった。

この犠牲者は、今までの成績優秀者ではなかった…。これまでの死因は飛び降り自殺、密室での溺死と刺殺ではなかったのである。

純平『僕の推測は間違っていたのか……。いや、化哨は今回の事件に絡んでいる！！僕の感だが……。そろそろこちらの行動に気付いてもおかしくない。注意しなければ……。』

（高坂が『俺達』をかき廻ってるな……。探偵きどりか？！）

（邪魔になれば殺ればいい。）

（どうせ一般人には俺らは裁けないしな。）

ターゲットとなる神は三人いた……。

高坂 純平の章 第7話 裏切り者

神は三人いた。

その事はジャッジから純平に告げられた。

ジャッジとは神を選び、最後まで見届ける者。もし神のルールにそぐわなければその神を罰する者。

しかし、今回の相手方の神は三人。チームを組んでいる。誰にも知られてはいけないというルールに違反しているのである。

純平の部屋では例の如く暗闇に包まれククにつく者は説明する。

ククにつくジャッジ

『純平：残念ながら我らジャッジの中に裏切り者がたゞ。そのジャッジはルールを無視して複数の神を作りだし、殺戮を行っている。その神達は己の利にそう殺人、もしくは無差別殺人を楽しんでいる。許してはいけない。純平！！彼らに死という罰を！！』

神は能力をもつ。勿論、純平もそうだ…。

ククにつくジャッジ

『純平！！君の能力は名の通り「高さ」と「坂」だ…。上手く使え！！行き当たりバッタリではそう使えないぞ！！』

純平『大丈夫。理解しているさ…。上手く使わせてもらうよ。』

純平は翌日…化哨の家に向かった。

化哨の実家は高層マンションの30階だ。親は実業家でかなり裕福な家庭のようだ。負けず嫌いな性格は親譲りに違いない。

純平は空を見上げると、一直線に上空へと舞い上がる！！そのまま滑り台のように横に移動した。

これが純平の能力。『重力』を操る事ができる。そのまま化哨の部屋のベランダまできた。

純平は部屋を覗いた：

『あらよつと！！化哨くんは何してるかな？！』

そこにはあきらかに尋常でない殺戮者の目をした化哨がいた…。

高坂 純平の章 第8話 親友への疑い

化哨がパソコンをみながら呟いている。

化哨『後藤 進か…なかなかいい成績みたいだな…。可哀相に…。僕より上になりそうだから悪いんだよ。彼の1番信用している人は？！こいつか…。』

純平は目を疑った！！化哨の姿がみるみる変わっていく！！

(あっ！！あれは酒井くん！！)

驚くあまり純平は足元の花壇に足をぶつけてしまった！！
『誰だ！！そこにいるのは！！』

化哨が慌ててベランダに飛びだす！！だが誰もいない。

『気のせいかな…まっここは30階だしな。いるわけないかな…。』

純平は危機一髪、上空へと身を隠していた。

純平『これで化哨が神である事の裏がとれた。あとは被害がでる前になんとかしないとな……。』

数日後、自習室で後藤は勉強していた。彼は志望校合格を目指しとにかくあいた時間は勉学に励んでいた。そんな彼に声をかける人物がいた。

『後藤！！夜ちょっと時間とれないか？！少し話があるんだけど……。』

知らない人が見ても仲のよい友人に見える。そう言い寄ってきたのは酒井のようだ。酒井は海外に語学留学して最近帰ってきたようだ。

後藤『……。なんかようか。まっお前に俺も話したい事があるからいいぜ。』酒井とは反面後藤はいかにも嫌っているかのようなそぶりをしている。

最近、酒井が後藤についてよからぬ噂を流しているとの話しが後藤の耳に入っていた。その事の真意を確かめたかったのだ。後藤と酒井は幼少の頃からの親友だ。そんな友が自分の変な噂をまくような事は考えられなかった。それに親友に疑いをかける自分が嫌だったのだ。

その夜、人のいない予備校の屋上に後藤と酒井の姿があった。二人の間には距離があいていた。それだけ後藤は酒井に対して信用が薄れているのだろう。沈黙をやぶったのは後藤の方だった。

後藤『酒井：最近、妙な噂が広まっています。俺がカンニングしているとか、大学の裏口入学を斡旋しているとか：：それがお前が噂を広めているって聞いたけど、どうなんだ?!』

酒井はにやけて話す。

『後藤：違うのか?! 最近、成績が上がって調子じゃね?! 志望校の教授とも最近会ってるじゃん?! そら疑うっきゃねえじゃん?!』

後藤は成績が伸びたのは自分が真剣に頑張ったからであり、大学教授と会ったのも大学での話を聞きたかったからだと懸命に説明した。

酒井『そうか…後藤すまん。俺が悪かった。』

目の前で親友が頭をさげて謝る姿をみて後藤は酒井に近寄った。疑いが晴れ心を許したようだ。

後藤『いや俺も教授にあったり疑いをもたれるような行為をしたのも悪いんだ…。すまん!!』
そう言うとき後藤は酒井の肩に手を置いた…。

その時だった!! 酒井はその手を掴み胸を強く押し屋上から後藤を突き落とそうとしている!!

必死にもがく後藤に対して酒井は言った。

『ここに遺書がある。お前は自殺するんだ。死ね!!』

酒井は化哨だった。この遺書も化哨の能力の一つだった。化けた人物のあらゆる行動を真似ることが出来るのだ。事前に後藤になり遺書を用意していたのだ!!

後藤『酒井!! やめろ!!』

必死に抵抗する後藤も疲れこれまでかと思った時、屋上に現れた者

がいた。

『それまでだ!! やめろ!!』
純平と本物の酒井だった。

高坂 純平の章 第9話 まだ知られぬ神

そこに現れたたのは純平と酒井だった。

後藤『?! 酒井が二人?!』後藤は驚きを隠せない。似ていると
いかどうみても同一人物が二人いるのである。

化哨『高坂 純平!! お前!! よくも邪魔してくれたな。いい気にな
るなよ!! いずれ白黒つけてやるからな!!』

そう言い残すと化哨はその場から逃げ出した!! 後藤がそんな化哨
を追おうとする。

『やめろ!! 無駄だ。それよりも追う事の方が危険だ。やつは姿を
変える、人混みにまぎれたらもう追えない。逆にやつに狙われる!
!』

純平は後藤を止めた。そして後藤から酒井にこれまでの起こった事
が告げられた。

後藤『しかし、なんなんだ。やつは…もう何がなんだかわからない。』

酒井『でもよかった。お前が無事で…。純平が俺に変なうわさをたてられているから、後藤の誤解をとった方がいいって言われてさ。…でもなんで純平はここがわかったんだ?!』

純平『…いや、単なるお節介屋だよ。君達があんなに仲がよかったのに急に様子がおかしくなったから、ちよくちよく見てたんだ。でも二人の仲が直ってよかった。今日の事はもう忘れよう!! 深入りは危険だ。』

三人はその場を後にした。

「とある一室」

化哨が怒りをあらわにし、暴言をはいている。
化哨『高坂 純平…やつのせいで僕のリズムが崩れた。こんな屈辱は初めてだ!! 殺してやる!!』

??? 『化咩くでもお前もう能力ばれてんだろ?! 出来んのか?!
俺らがやってやろうか?!』

??? 『そうだな…。でも殺すのは簡単だが、奴に絶望感を味あわせてやろうぜ。』

そう…純平の相手は神が三人だ。不利といえるだろう。だが、彼らはまだ気付いていなかった…。純平も自分達と同じ神である事に…。

そして…そんな彼等を黙って見つめる人物がいた。

高坂 純平の章 第10話 呼び出し

予備校も一時期の混乱もおさまり、また受験生が時間を惜しみながら勉強に励む場と戻っていた。

あの時から化哨は姿を現わしていない。警察も動きだしてはいたが、『遺書』があるだけに自殺での化哨の関与とは断定されていなかった。が、姿を消している事もあり、刺殺の面で捜査がすすめられていた。

純平といえば友人の篤と亮といつも通りの生活だ。

亮が予備校の終わった午後カラオケで女の子を誘ってきたみたいだ。

亮『篤！！喜べ！！わが予備校のアイドルのあやをカラオケに誘うことに成功したぞ。ふふふ…苦節1年、やっと積み重ねられた努力がみを結んだのであります。』

篤『すげーすげーっなおい！！どんな手を使ったんだおい！！』

亮『…………純平の名前をだしたかな?! と言えば…。』

篤『そういう事か…まっいいじゃねか!! 他の子もくるんだろ?!』

亮『たぶんな!!』

その日の夕方、順平達はあやとの待ち合わせ場所で待っていた。

時間にさしかかる頃、あやがやってきた。どうやら一人のようだ。

あや『亮!! 篤!! 純平…待った?!』

明らかに純平の時だけ言葉にうれしさと恥じらいが感じられる。亮と篤にもそれは感じられた。

あや『純平!! 最近模試の成績伸びてるじゃない!! それに引き換

え…その二人は逆に落ちてるみたいだけど…。」

亮『あや!!他の子達は?!店に直行すんの?!』

あや『他?!来ないよ。あやだけってご不満ですか?!なんなら純平と二人だけでもいいんだけど、亮と篤…あんたら来んの?!』

純平『あや…悪いけど、俺ククにご飯あげないといけないから、帰るよ。』

あや『なんだ…純平が行かないなら私も行かない!!じゃあねえ…純平!!』

結局、その場所に残るのは亮と篤だけになりそうだ…ったが篤がみあたらない。

純平の携帯が鳴りだした。

『やあ…高坂 純平。後藤や酒井は気付いていなかったが、君は僕の事に気付いてるみたいだな。おかげで僕の生活リズムめっちゃくちゃだよ…。殺してあげるよ。かと言って呼び出して素直に来るほど君も馬鹿じゃないだろうから…先に一人来てもらう事にしよう…。では、また後でね。高坂 純平…。』

化哨からだった。

高坂 純平の章 第11話 残りの神

篤がみあたらない。

そして、化哨からの電話。もう純平はこの二つの出来事が結び付かないなんて思えなかった。

亮『どうした?! 純平?! 篤か?!』

純平『ああ…。先に帰るってさ。俺もククにご飯をあげないといけないから帰るよ…。悪いな…。』

純平は一時帰宅して化哨からの電話を待つ事にした。いつ連絡がくるかわからない携帯ほど電源がおちてないか心配するものである。充電器に携帯をセッティングしていつでも行けるように念の為に予備の電池まで準備した。

あれから3時間はたったであろうころか…。やっと化哨から連絡が入った。

化哨『やあ!! 純平くん!! 気分はどうだい?! やっぱり立場的に優位な位置にいるのは気分がいいねえ。僕は負けず嫌いなんだよ。君は下、僕は上なんだ。わかるかい?!』

純平『篤は…無事なんだろうな!! 篤に何かあったら許さないぞ!!』

化哨『ん?! 殺したりなんかしないさ。君が来てくれればね。さあゲームを始めようか?! 絶望というゲームを!! 約束しよう君には絶望なる死を与えよう。今、廃墟になっている○△ビルに夜11…30に来い!! さあゲームの始まりだ。』

待ち合わせの時間に純平は指定された廃墟となっているビルにやってきた。

奥に椅子に縛られた篤がいる。外傷はないようだ。化哨が奥から現れた。

化哨『純平…いらっしやい。君のおかげで僕の生活リズムはめちゃくちゃになっちゃったよ。でも、これだけは教えてあげるね…。人

生はめちやくちゃじゃないんだよ。法では僕を裁くことはできないんだよ。誰が信じる?! 僕が姿を変える?! 誰も信じないさ。でも、僕は許さない!! この僕に敗北感を味あわせた君に!!」

純平『俺を殺すか?! それは構わないが関係ない篤を開放しろ!!』

化哨『違うんだよ。高坂 純平…。君には絶望な死を与えてあげると言ったろ?!』

純平『……………篤?!』

篤は縛られていたと思っていたが自らロープを外し立ち上がった。

化哨『純平くん…彼は関係なくはないんだよ。僕の仲間なんだからさ。そして彼もね…ククク…。』

奥から亮が現れた!!!

純平のターゲットである神の残り二人が篤と亮だった…。

目の前にはうつすらと純平を嘲笑うような笑みをうかべる三人が肩を寄せ合っていた…。

高坂 純平の章 第12話 対話

亮と篤が残り二人の神…それは順平にとって信じがたい事実だった。今まで共に過ごして日々は偽りだったのであらうか…そんな思いが純平の脳裏に浮かぶ思い出と交差した。

亮『純平どう?!びっくりした?!まさかって感じ?!残念だったなあ…こんな結果でさ…ちなみに俺の名字は川尻…川知り…水を知りつくす者。これまでの溺死は俺がやったんだ。もがいて死んでいったなあ。あの死んでいく瞬間がたまらない…。まあ…篤ほど残酷じゃないけどね!!』

篤『改めて自己紹介するよ。佐久間 篤。裂く魔と言ってくれている。切り裂く事が俺の喜び。鋭利な刃は俺の意思に従う。ちよつと意外か?!』

純平『狂ってるよ。お前らは…。いつからなんだ…いったい?!』

化哨『俺から説明しよう…。』

そう言う化哨はどのようにして神となったのか?神とは何か?を純平に話した。

ジャッジと呼ばれる者にまず化哨が力を与えられ、日頃の生活に不満を持っていた亮と篤にも声をかけて彼らにも力を与えさせた事。実は彼らは化哨とは小学校からの知り合いであった。また神とは人の死を自由に操ることができる者だと…。

亮『純平…前々からお前のことは気に入らなかったんだ!!女にはモテるし!!俺らはいつも女には邪魔者扱いされるし!!』

篤『お前と付き合ってたのも正直、女が寄ってくるからだっただよ。それがどうだ?!お前のピエロになってたよ。俺ら…。』

化哨『そんな不満な生活を送っていた彼らに喜びを与えたんだよ。神という殺人の仕事を!!彼らはすぐに生き甲斐を見つけたんだ!!どうよ?!この生気に満ちた彼らは?!人を殺すたびに…その殺された人の生気を奪うかの如く生き生きとしている!!どうだい?!高坂 純平!!友人の成り果てた姿は?!絶望したろ!!最後だ…友から死を与えられろ!!』

亮が水筒から水をだすと水の塊が中を舞う!!

亮『俺は水を操るんだ…純平。これを君の喉の中で固定して窒息死させてあげるよ。』

水の塊が純平の口の中に入り込む!! しかし、どうだろう。純平はなんともない。普通に飲み込んでしまっている。

篤『何やってんだ!! 俺にまかせろ!!』

篤はナイフを数本投げ付けた!! が、すぐに地面に落ちてしまった。

亮、篤『なっ…なんだ!!』

純平『ダメなんだよ。亮、篤…【落とさせて】もらったよ。君たちはこの人間社会では法で裁かれない。だから…だから友人として同じ神としてせめて僕が裁いてあげるよ。』

この時だった三人が純平も神と知ったのは…。

高坂 純平の章 最終話 友との別れそして…

純平は神である事を三人に告げた。神の真の存在意義についても語った。

化喟『亮！！篤！！不用意に純平に近づくな！！こっちの手のうち
はばれている！！』

化喟、亮、篤

『うわぁ————！！』

すでに遅かった。純平の能力で近くの空き地の頭上まで上げられた。

純平『化喟…君の言った通りだよ。やっぱり君は上…僕は下だ。亮
…篤…君達と過ごした日々は忘れないよ。今までありがとう…。』

化喟『純平！！まさかお前とはな！！ジャッジの奴が言ってた俺ら
を殺しにくるかもしれないという神が！！』

どんどん上空へと舞い上がったが…徐々にスピードが落ちていく…。

そうフリーフォールのように……。最高点に達するとピタリと止まった。その「止まり」は生の終わりを意味していた……。三人は自らの死ぬ直前を感じて死んで行った……。

（これが神の仕事……。こんな事を僕はいつまで続けなければいけないんだ?!）

そんな思いをして順平はそっと目を閉じた……。

〔翌日〕

三人の死体が発見され、警察とやじ馬で現場はざわめいていた……。変死という事もあり、メディアでも放送された。

朝方：純平はテレビを付けた。

『今日未明、東京都○△区の広場で男性3人の死体が発見されました。不思議な事に現場の状況から広場の上空から落ちたのでしょうか考えられない……』

純平は頭をかきながらぼやく。

『なんだそれ！！パパにはよくわかりましえ〜ん。』

ククと朝から遊ぶこの青年こそ、この事件の殺人者…神である高坂純平本人だ。彼は記憶を消されていたのだった…。

彼の神の仕事は始まったばかりである。

高坂 純平の章 完

ジャッジ〜人生の幕〜

…なにも聞こえない…。周りに誰もいない。無と言える空間に彼はいる。

手は鎖で縛られ…また足は地面に固定され…目にはアイマスク…口には喋る事のできないように…声すらだす事のできないようにされている男がそこにいた。

彼の存在が死を意味するとし、かすかな自由さえあれば死を相手に与える『危険人物』とされていた。

彼がこんな身となってもう10年の月日がたつ…

でも、なぜそこまでして生かされているのか?!

これはそんな男の話である。

人を殺し続けて…彼はある領域に達する。始めの衝動から気がついた時には…自分の力に対する…殺る事に対する『アキル』と言う感覚を覚える。殺人鬼が思うその感覚はある種の『悟り』的な意味を含んでいた。

それは自分自身を死を極めた者とする『ジャッジ』という者を誕生させた…。

この世の中にジャッジと呼ばれる者は12人とされ彼はその一人のようだ…。ジャッジには人間としての自由はすでになく…『意思』が唯一の人間的に存在できることだった。

もはや悟った彼に欲というものはなく…『死』により秩序を成り立たせる存在となった。そんな彼は自分自身を自由の身にしたいなんてことはもはや思わず、ただ秩序を作る為に生きることと自分の存在を決めていたのだ。

その存在意義が『神』なる存在を作ること…繋げることである。

現代社会に於いて『法』に従う者達は『殺人鬼』を捕らえ罰するとともにあらたなる『ジャッジ』の発掘をしていた。ジャッジは12人であり、その数は古来より変わる事のない数字である。

ジャッジを発掘した決して一般には知られる事のない闇の法の機関はジャッジから自由を奪い、彼が死ぬまで『生き殺し』状態にする。そう彼らは『死刑』が確定した者達なのだ。

そんな身のジャッジ達も人間であるが故、人生の疲れを感じるようになる。その時始めて己の死を受け入れるのである。

この日に一人の男、鏡 伸介という男のジャッジの仕事を終えた。

『人間の秩序を守るのが仕事：最高判断者ジャッジがこんなサイコな男だとは誰も思わないだろう。ただ秩序維持が死である事は哀しいものだ。人の行く末は：いやもういい。もう疲れた：。人生の幕を下ろそう…。』

彼は一步一步命の尊さを感じながら死刑の場へと歩いていった：。

ジャツジゝ人生の幕ゝ完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3936e/>

殺人の記憶

2010年12月16日02時33分発行